

Letters of the

# SHELLEY COLLECTION

Number 1 February 1987

The Bunkyo University Koshigaya Library

## Shelley の “Julian and Maddalo” について●●● 本田 和也

‘Prometheus Unbound’ の神話解釈による  
荘大な人類の解放の理想に貫かれた詩の世界  
の創造の間を埋めるように書かれていると思  
われるが、‘The Cenci’, ‘Julian and  
maddalo’, ‘Lines written among the  
Euganean Hills 1818’, などの劇詩、ないし  
抒情対話詩である。‘Prometheus Unbound’  
の広大で、宇宙創造への想像力は、これが人  
間の手でなるのかと思われるほどの、大いなる  
羽搏きで神話世界を自由自在に飛び交って  
いる。‘Prometheus Unbound’ の主題が  
Shelleyが彼の詩の根源に据えた ‘Freedom’  
への希求であったことは明らかであるが、そ  
れと同時に深い苦悩を背負った人間がいたこ  
とを忘れるわけにはいかない。1818年、  
ShelleyはItalyの地で異郷人として詩に留め  
ているのは、闇を内にかかえ込んだ詩人とし  
ての自分のありようである。‘Lines written  
among the Euganean Hills’ も ‘Julian  
and maddalo’ も、眼前の光景を正確にしか  
も生々と記述しているそのリアルな方法にま  
ず驚かされる。詩は現実の世界をもっと現実  
に近づけ、本物に仕立てている。想像力が現

実を冷徹に射抜く力を得ているのである。  
描写されるべき対象はきりりとしたわく内に  
ちゃんと取っている。詩は現実世界を離れる  
ことがない。あくまでも詩はリアリティを、  
そのあるがままの相として描く所から始まっ  
ている。人間の苦悩—友情、愛、苦痛、絶望、  
狂気は細かい感情の起伏のままにそれぞれ細  
部にまで描き出されていて、詩全体はあたか  
も細密画の忠実さなのである。たとえば、イ  
タリーもののひとつである、‘Julian and  
maddalo’, は Shelley の理想肌を身につけ  
たJulian とByron とまでいわれるmaddaloの  
対話詩である。Julian はmaddalo 伯爵と舟を  
漕ぎ出し、Lido の岸辺に出る。海は無限の  
空間になって広がっている。Shelley は詩の  
冒頭でいちじるしい綿密な描写を試みる。

I rode one evening with Count Maddalo  
Upon the bank of land which breaks the  
flow  
Of Adria towards Venice: a bare strand  
Of hillocks, heaped from ever-shifting  
sand,

Matted with thistles and amphibious  
weeds,  
Such as from earth's embrace the  
salt ooze breeds,  
Is this; an uninhabited sea-side,  
Which the lone fisher, when his nets  
are dried,  
Abandons; and no other object breaks  
The waste, but one dwarf tree and  
some few stakes  
Broken and unrepaired, and the tide  
makes  
A narrow space of level sand thereon.  
Where't was our wont to ride while  
day went down.  
This ride was my delight. I love all  
waste  
And solitary places; where we taste  
The pleasure of believing what we see  
Is boundless, as we wish our souls to be:

(私はある夕べマダロ伯爵と舟を漕いで  
陸地の堤を進んで行った、ヴェニスに向っ  
て流れて行く  
アドリアの流れがそれで止められている。  
何も無い小丘の渦、  
つねに動いている砂から盛り上がって  
あざみや水陸両生の雑草がマットのように  
敷いてあり、  
地面から塩がしみでて  
成育しているようなやつなのだ、無人の海  
の片  
漁師はかれの網が干終ると  
浜を見捨ててしまう、一本の低い木と  
壊れて、修理されていない二、三本の杭の  
ほか  
こうりょうとした海岸を遮るものはない、  
潮がそこに平らな砂の狭い空間を作ってい  
る、  
日が沈むと私達はいつも舟を漕いでいった

のはそこであった、  
この舟漕ぎはたのしかった、私はすべて荒  
れた  
寂しい場所が好きだ、そこで私達は目にす  
るものが  
無限であると信ずる快樂を味わう、  
私達の魂がそうであってほしいと願うよう  
に、)

‘Julian and maddalo’に見られる舟漕ぎも、  
Mrs. Shelley によれば Shelley のもっとも  
好ましい行為であったらしい。

‘Shelley's favourite taste was boating.  
When living near the Thames or by the  
Lake of Geneva, much of his life was  
spent on the water. On the shore of  
every lake or stream or sea near which  
he dwelt, he had a boat moored.’ といひ、  
‘I love all waste and solitary places’ を  
‘Julian and maddalo’ から引用している。  
彼ら2人は舟漕ぎつつ、沈んで行く夕照の中  
で話し合っている。「漕ぎながら、私達は話  
した、思いがす早くめぐり、笑い声にはばた  
き、留まっていなくて、脳から脳へとめぐつ  
た、そんな歎息は私達のものだった」。だが、  
相手マダロ伯爵は自分の天才の力で目潰しに  
していて、虚無しか信じられないのだ。  
Julian は maddalo とすれ違ひの議論を重ね  
ながら、その伯爵の魂を驚くようだと形容し  
た。「私の友は暗い側面をとらえたのだ、思  
うに、彼は同類よりもずっと偉大という感覚  
があつて、彼は驚くような魂を打って目潰し  
にした、その遥かに輝かしい光を凝視してい  
て」と詩の中で論評している。  
イタリアの山谷、葡萄畑、町の塔、海に日が  
落ちる頃、沖合いの島が鐘を鳴らしている。  
maddalo 伯爵の話ではその島には精神病院が  
あつて、そこに居るある狂人を知っているら  
しいのだ。伯爵はその男に樂器を送り届けて

いて、狂人はそれを奏するのだ。鐘楼から響く夕べの祈りの鐘を聞いて、明日にも島を訪れ、その狂人に会おうと話す。彼から何らかの生きる証が得られるかも知れないとの憶測から荒れた海に舟出し、やっと例の狂人に面会する。しかしそこから得るものは何もなく、Julian はイギリスに舞い戻る。愛の破局から狂人になってその運命を辿らねばならない男は、1814年頃のShelley であるとか、哲学の支柱を失ってしまった彼自身の、Shelley 自

身のヴィジョンともいわれるが、‘Julian and Maddalo’ にはわれわれ、人間の状況に対する洞察が美しいが、詩人の心の痛みそのままに叙述されているとって良いであろう。人間の暗部さえも一瞬のうちに焼きはらわれてしまう戸惑いさえ感ずる ‘Prometheus Unbound’ の神話の大きいモチーフと異った詩の次元で、われわれの存在を問う詩の世界が ‘Julian and Maddalo’ にひらけているといえるだろう。

〈Essay〉